令和３年度第２回東日本大震災津波伝承館運営協議会の開催結果

日時　令和３年 11 月 18 日（木）10 時 15 分～11 時 45 分
場所　国営追悼・祈念施設管理棟セミナールーム

１　藤澤副館長挨拶

本日は、ご多用のところ、お集まりいただきありがとうございます。

また、委員の皆様には、日頃から当館の運営にご協力いただき、感謝申し上げます。

本日は、今年度２回目の運営協議会となりますが、今年度の上半期の事業を中心に、ご報告申し上げ、皆様からご意見を頂戴したいと考えております。

新型コロナウィルスが全国的に拡大し、岩手県において県独自の「緊急事態宣言」が 8 月 12 日に発令されたことに伴い、当館は８月 13 日から９月 17 日までの 36 日間臨時休館したところですが、再開後、来館者も徐々に回復し、累計の入館者数は 43 万人に達したところです。

伝承館を取り巻く環境の変化としては、６月に宮城県石巻市にみやぎ東日本大震災津波伝承館が開館、当地域においては、大船渡市の防災学習館や、陸前高田市に仮設住宅体験館が運用開始したほか、7 月には県立野外活動センターが本格的に運用を開始するなど、他の施設との連携もこれから重要になってくるものと実感しております。

当館の運営状況につきましては、この後詳しくご報告しますが、委員の皆様からこれまでご意見のありました、例えば、震災学習、防災学習という視点では、学校関係の来館も着実に増えておりまして、小学校は県内中心、中学高校は、県外からも多くの学校が来館しております。「昨年来てよかったので、今年も子供たちを連れてきました。」というような声もいただいているところです。

最近は全国的に新型コロナウィルスの感染状況が落ち着いてきていることから、東京、大阪などを発着する観光ツアーのほか、他県からの自治体視察なども増えてきている状況です。

今後とも引き続き、感染予防対策をしっかりと講じ、来館者の皆様に安心してご来館いただけるように運営していきたいと思っております。

皆様には忌憚のないご意見をいただき、今後の運営に生かしていきたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願いします。

２　委員紹介

出席者名簿により、委員を紹介した。

３　議事「令和３年度東日本大震災津波伝承館の取組状況について

事務局から説明した後、質疑を行った。質疑の内容は次のとおり。

（団体予約と教育旅行の分析について）
（柴山委員）都道府県の団体予約状況について、いろいろ分析をやっておりますけど、ちゃんと要因分析というか、ここが来ていると来ていないところ、都道府県も、これでいうと 35 都道府県は来ているけど、それ以外の 12 都道府県は来ていないと思いますので、そういうところは何故来ていないのかっていうようなところ、また１件しか予約がない都道府県もありますので、そういうもうちょっと実績だけではなくて、分析をちゃんとしていただきたいなっていうところと、あと岩手県全体の教育旅行に対する個々の役割っていうのは、どういう役割になっているか、全体的に、教育旅行でどれぐらいのパイをここで持っているか、というのを分析してあげていただきたい、というのがあります。
　あともうひとつですが、ここがゲートウェイという役割ということが本当になっているかというところを、パークガイドももちろんありますし、いろんなところの、岩手県内の沿岸部とちゃんと連携ができているか、その人たちが流れているか、ここが終着点で終わりということではなくて、そのあとのツアーは終着になってもいいかもしれないけど次またここに来てもらうような仕掛けというのはちゃんとできていないと、ここはすごく中心的な役割なので、いろんなところに波及効果を出すための施設だと私は思っているので、そういうところをもうちょっと要因分析っていうのが欲しいなというところがあって、今コメントにも近いのですが、何か回答がもしあればお願いできたらと思います。
（事務局）教育旅行としては、修学旅行でいらっしゃる場合と、そして、校外学習としていらっしゃる場合、いうようなパターンがあります。ちょっとそういったどういう傾向になっているのかっていうところは、分析しきれてないところでございますけれども、多様な学校の機会を使って伝承館に来ていただいているというところは、あるように思っております。
（柴山委員）多分分析をしないと、今後それが悪い方向に進んでいるのか、いい方向に進んでいるのかっていうのがあまりよくわからない状況になると思いますので、ぜひそこは分析することと、ほかのところ、マルゴト陸前高田もそうですけど、いろんなところで教育旅行がどういうふうな形になっているかを、ちゃんと分析した方が、今後の運営に対してもいい効果が出てくると思いますので、ぜひお願いします。
（藤澤副館長）今、柴山委員からお話あったとおり、特にコロナ禍における教育旅行に関しては、例えば関東あるいは隣県から来ている生徒・児童は一時的なものなのか、あるいは来年以降も継続してもらえるのかという辺りについては、確かに今後、学校をフォローしながら、分析しなければいないことだと思っていますので、今も県内については学校訪問を行っておりますが、岩手県内の学校も、本当は仙台に行く予定だったのを沿岸地域に変更したという流れもありますので、そういった辺りはしっかりと分析しながら、一度来ていただいたところはまた来年も来ていただけるような形に繋げていけるように分析をしていきたいと思います。
　あと一つ目の、来ていない都道府県等についても、なかなか詳細な分析ができておりま

せん。特に、例えば観光ツアー等については、細かく言いますと、大阪、愛知発着ですと、近県の三重県から予約が入っていないが、そういったところからもお客様が来ているのではないかと想像はしますけれども、もうちょっとその辺またそれもコロナ禍における流れ等もあると思うのですが、例えば旅行代理店等からヒアリングするなどして、要因分析等できればと思っております。

（南会長）以前、県立大学で分析調査したことがありましたが、その取組みは続けられるのですか。

（事務局）　（コメントなし）

（年齢層に応じた解説のコンセプトとアンケートの結果について）

（越野委員）伝承館に来ている小学生というのは、大体何年生ぐらいが対象になっているのでしょうか。例えば小学校の修学旅行だと小学校５、６年生だと思うのですけれども、そういう高学年なのか低学年なのか。それから小学生、中学生、高校生、大学生、それから一般の方、こういう人達というのはやっぱりニーズが違うと思うんですよね。例えば県の教育委員会だと、小学校、中学校、高校によって防災訓練の焦点が違うんですよね。そういう意味でここの伝承館では、小中高あるいは一般の方にどんなコンセプトで伝えているのかということがちょっと気になるんですよね。一律ではないと思うんですよね。やっぱり小学生は小学生を対象にどういうことを伝えたらいいのか、中学生だったらどうなのか、というふうなことがあると思うんですよね。県の教育委員会では例えば、小学生では津波とは何で津波が起こったら何が重要か、中学生だと助けられる側から助ける側へとういうようなことを中心に、高校は地域の街づくりや地域づくりコミュニティづくり、復興に関わって何ができるか、とういうようなことを焦点にやっているのですけれど、そういうことが学習できるような伝え方をしているのか。あるいは一般の方には自分の住む町でどんなことに取り組んでいかなければならないのか、ということに繋がっているのか。対象によってやっぱり伝え方というのが変わって然るべきだと思うんですよね。標準はどうなっているのか。アンケート調査をそういう対象別に取っているのか、とういうのを教えていただければと思います。

（立花副館長）小学生のどんな学年の児童が多かったかということについてですが、修学旅行ですと６年生、その他の校外学習でも高学年が多いです。伝承館に近い学校は低学年、１年生から来ている学校もありますけれども、主に高学年とういことになります。それから伝え方のコンセプトといいますか、相手によってどういうふうに伝えているかとういことでございますが、これについては、小学生、中学生、高校生それぞれについて、解説員が焦点を異にしながら伝えているところでございます。例えば小学生の中学年、３・４年生ですと、まず津波ってどんなことか、どんな被害があったのか、とうことを知るということがありますし、中学生ですといろんな災害に対していろんな仕事をしている方の紹介をしながら、自分でも助ける側、例えば避難所を運営する側とか、その人の仕事を知るこ

とによって、将来自分の仕事はどういう選択に持っていけるのか、要するにキャリア教育の観点で話をしています。高校生の場合では岩手を出て行く高校生が多いわけですから、岩手でどんな事かあったのか、これを他の人に伝え、他県の人に伝えることが大事だよということを伝えています。それから地元に残る高校生もいますので、地元の地域起こしといいますか、地域活性に向けた取組みというところを話ながら解説をしています。そういった見学する相手によって様々変えているようなところがございます。なおアンケートをそのまま取っている訳ではなくて、なぜこういうふうに変えたかったといいますと、県内の学校訪問をしまして、それによって学校側からの要望といいますか、こういうことを解説してほしい、ということを聞きながら、それを解説員に還元してやっているところでございます。

（越野委員）アンケートの結果はどうだったのでしょうか。こちらで意図したことが相手に伝わっているのでしょうか。そういうことはアンケートを取らないと分からないと思うのですが、その辺はどうなのでしょうね。

（立花副館長）見学いただいた学校には簡単なアンケートを取っていますが、どの程度伝わったかとか、どの程度役に立ったとかという細かいところまでは、アンケート項目ございませんので、そういったことはアンケートに入ってございません。しかし、一度来館した学校にも学校訪問しておりまして、実際の生の声を聞いているところでございます。アンケートには書けないような声も汲み取りながら、学校訪問しているところでございます。

（越野委員）アンケート結果についても、協議会の報告書に付けていただけるとありがたい。子供達がどういうふうに感じたのか、こういうことを知りたい、といったことがあると思いますけれども、そういうことも伝承館の改善にも繋がっていくと思いますので、ぜひ力を入れていただけたらと思います。

（南委員長）ありがとうございます。ご助言かと思いますので、ヒアリングした内容で報告書に記載できる部分は掲載していただくとか、意見を聞きながら改善を進めていくということが必要です、というご指摘です。

（企画展示の狙いと効果について）

（伊藤委員）企画展示についてですが、企画展示をやってどんな効果があったのかということが記載されてないんです。例えば６月 11 日から７月 11 日に開催された「東日本大震災津波と三陸ジオパーク」、この期間の来館者数は別に変わっていないんですね。誘客を目指してこれをやったのか、県内の人に見てほしくてやったのか、特に見てほしくてやったのか。あるいは情報発信の仕方に関しても、例えば修学旅行生に見てほしいのであれば、修学旅行生が来るタイミングでこれをやらなければならない訳ですけれども、来るタイミングというのは１年前に決まるんです。イベント企画というのは、１年以上前に来るか来ないかのタイミングで、そこまで学校側へ情報発信していかないといけない。この企画展示の狙いとそれをやった効果というのが分からないと、企画展示自体が成功しているのか、

失敗しているのか、僕らも判断つかない。ただやったんだということにしかならない。どういう目的でやって、それで効果がないのであれば、別の新しい企画に入れ換えるとか改善していけるのと思いますので、今回でなくてもいいのですけれども、動向とかお示しいただけるとありがたいです。

（南委員長）段々求める要求も高くなってきましたが、できるところを探しながらでお願いします。

（藤澤副館長）ありがとうございます。企画展示は２種類ございます。一つは当館単独の自主事業として実施するもの、もう一つは東海新報や釜石海上保安部など関係機関との共催で実施するものです。自主事業は基本的に常設展示では説明しきれていない点を補完するという目的でやっておりますので、そういった意味において、常設展示をご覧になっていただいた人に見ていただきたいという目的でやっておりますし、また、ジオパークの関係ですと、当館のゲートウェイ機能を補完するという意味で、この企画展示を見ていただいた方が沿岸に足を運んでいただけるように、また、過去の大きな震災の事実と教訓ということで、第２回企画展示「三大震災の事実と教訓　今から始める防災・減災」では、しっかりと自助と共助の大切さというものを一人ひとり見てもらいたいということを目的に実施したものでありますが、見た方の細かい評価については、こちらで触れていなかったものですから、協議会で報告するときは、お示しできるように工夫していきたいと思っております。

（伊藤委員）ありがとうございます。いろいろ事情もあると思いますし、目的も企画によって違うと思いますが、最終的に自助共助を知ってほしいとか、沢山の目に触れてほしいとかがありますので、そのためには地元の人達に見てもらうために陸前高田市の広報紙に載せてもらうとか、新聞に広告を載せるのか分かりませんが、情報発信の仕方も違ってくると思うのです。地元の人でもこういう展示があるということは知らなかったりするので、情報発信して沢山の方に来てもらえるように考えながらやっていただけると、こういった取組みも、より効果が出てくると思いますし、どういった効果があるのかということや、見てもらえるのかということが分析できると思いますので、ぜひよろしくお願いします。

（柴山委員）併せて、館の主催はいいと思うのですけれども、館以外の展示に関して規約がないと思うので、いろんな団体がやりたいと言ってきたときに、ちゃんと制約できるかということもあるので、そこはちゃんと規約を作っていただいて、この運営協議会で信任してもらうとか、というような形で進めていただかないと、今後増えていったときにどうするのかと悩むと思います。ぜひ規約を作っていただきたいと思います。

（南会長）共同事業というのは沢山申し入れが来ているのですか。

（藤澤副館長）ちょうどいいぐらいのバランスで相手方から相談が来て、私共も共感し一緒にやらせていただいているようなレベル感の数です。柴山委員ご指摘のとおり、当館でも基準を定めているものがないので、そこは課題として認識しているので、そこは検討してまいりたいと考えております。

（来館目的別アンケートについて）
（木村委員）基本的な質問ですが、１点目は、令和２、３年度の来館者数の説明がありましたけれども、この数字というのは当初の目標数値よりも多いのか少ないのかどういう結果だったのでしょうか。２点目は、教育旅行や観光で来館していただいた方から、感想といいますか意見というものを来館目的別に捉えているのでしょうか。３点目は、今年からパークガイドが始まりましたが、パークガイドの少人数の団体ツアーからこちらからお聞きするようなかたちで情報収集をするということをやってもいいのではないかと思います。４点目は、地域とかいろんな組織との連携についてですが、三陸ジオパークの企画展示をされたということですが、大船渡、陸前高田、住田で構成する気仙地区三陸ジオパーク協議会という組織がありますが、そちらと一緒に取組んだのでしょうか。
（藤澤副館長）１点目の来館者数ですが、当初、目標というものは作らずにスタートしました。岩手、宮城、福島の中で最初にスタートした伝承館ということで、入館料についても色々議論がありましたが無料としたということもありますので、年間の目標等は設定せずにスタートしているので、今の来館者数が目標どおりかどうかの検証はありません。２つ目、３つ目の来館者のアンケートについては、学校からアンケートをいただいたり、事後に直接訪問して意見を伺ったりしていますが、一般の方々の意見等については、解説員が案内した際にいただいた意見等を日誌に記録して情報共有をしていますが、定量的なアンケート調査は今のところありません。
４つ目の三陸ジオパークとの連携については、岩手県の三陸ジオパークと共催して実施したものです。
（木村委員）地域で防災学習や語り部をやっていますので、そういったところと連携を取りながら、いろんな形で取組んでいくと効果が出てくると思います。
（藤澤副館長）先程情報発信のご意見をいただきましたが、確かに情報発信については、まだまだやり方や工夫の仕方が大いにあると思いますので、特にこの協議会の委員になっている方々と連携させていただきながら情報発信に力を入れていきたいと思います。

（学校のニーズに応じた取組と地元の学校との取組について、避難経路について）
（松村委員）大きく２点です。まず教育関係について、退職校長会でも学校現場のアンケートを見ておりまして、校長先生の話では、児童生徒が教育を含めて震災を知らない部分が多くなっているので、防災教育が非常に難しいという実態をどこの学校も捉えているようです。特に中学校については低学年がちょうど震災当時、母親のおなかの中にいた世代で指導が難しくなっているという話がありました。また、沿岸の学校と内陸の学校では、地域や先生や生徒の防災教育についての実態や認識が違ってきている部分があり、防災教育するうえで、各学校それぞれ実態なり課題なりが様々なので難しくなってきている。その中で特に小学校ですが、岩手の復興教育スクールを活用してすごく良かったというお声

を聞きました。このため、今後も各学校に回りながら、丁寧にその学校のニーズに応えるかたちで、学校独自の個性を生かした取組みが大事になってくるのだろうなと思いました。そして、せっかく市内にこんなすばらしい施設がありますので、陸前高田市内の小中高とのもっと密な企画というか取組みというか、ただ他の県内の学校のように見学して終わりではなくて、何かもっと密接な取組みがあると、子供たちへの還元にもなるし、そういうのが何かできないかなというのがひとつ考えているところです。２つ目は、避難行動を確認されたということですが、避難経路の更新はすごく大事なことだと思いました。それでお聞きしたいのですが、６月 21 日に看板を確認して課題を探るというような部分がありましたが、具体にどんな課題があったのかを教えていただけたらと思います。

（事務局）まず、避難経路を確認した際の課題ですが、公園内に矢板と呼ばれる小さな看板があり、これには避難の方向と避難先までの距離が示されているのですが、これが全体的に少ないのではないか、という意見がありました。また、実際に車椅子を使用して避難してみましたところ、高台へ行く道が急勾配だったため、果たして有事の時に要援護者の方々を避難することができるだろうか、という課題が出ました。

（松村委員）前回の資料の中に車で来館される方が非常に多いというのがありました。もちろん障がいを持っている方の移動、それから車で来た方の移動とか、様々な避難の方法のところですね、まだ街も復興途上ですので、新しい道路が出来たら高台に移動するときはこの道路がいいとか、常に避難するときに、ここは駄目だったらこっちだとか、この道路が出来たときはこっちだとか、常に状況を把握しながら安全な誘導方法というものをお示しするのがすごく大事だなと考えました。

（立花副館長）防災教育について、学校を回っておりますと、学校それぞれについて状況が異なっていて、未だに被災した家庭の子が多いので、中々取組めないという学校もいますし、内陸の学校ですと、防災教育をする上で、伝承館を見学することによって、これをきっかけとして自分たちの地域の防災を考えるというふうに使っているとか、沿岸と内陸で全く違う要素がありまして、中々一概にそういうことが出来ないので、細かいニュアンスを解説員に伝えながら、その学校が来たときに細やかに解説してもらっています。ただ共通しているのは、やはり津波を知らない子ども達が増えているというのはよく聞いていますので、そこのところは、津波が来たらこういうふうになったんだよ、ということを知ってもらうことが前提だと思っています。

（南委員長）沿岸部から来ているのか内陸部から来ているのかは分かるのですか。

（立花副館長）団体予約受付は学校名で登録しているので分かります。

（沿岸に関する情報提供と学校のニーズの把握について）

（高橋委員）２点ほど。まず、先程ゲートウェイ機能としての検証が必要だというお話がありましたが、私も観光分野に携わる者として、沿岸の市町村の方々は、三陸鉄道や水産業の体験プログラムができるということが、三陸の特徴だと思いますので、県外や県内か

ら来た方々が、更に三陸沿岸に来ていただきたいということを願っているのではないかと思います。ぜひ道の駅や伝承ロードの繋がりもあると思いますので、沿岸の様々な資料を置かせていただきたいと思っております。また、先程アンケートの話もありましたけれども、どういうところの学校が沿岸のどんなところにいらっしゃるのか、例えばＳＤＧｓの体験と復興の防災教育を組み合わせていらっしゃるというところがどれくらいあるのか、学校のニーズといったところもアンケートに加えていただけるとありがたいと思います。沿岸部は素通りされるというおそれも小さな沿岸部では持っておりまして、道の駅を整備して、少しでもリピートしていただいて、体験プログラムに繋げていきたいという考えを持っておりますので、できる範囲で結構ですので調査していただけたらと思います。２つ目は、単純なことですが 10 ページにＨＵＧの取組みが紹介されていますが、中学校と小学校で取り組まれたということですが、子どもさんにしてもこういった体験ができるということは思い出に残るというか、印象に残ると思いますし、いい取組みではないかと思いますが、この企画の趣旨ですとか、今後どういうふうにしていくのかを教えていただければと思います。

（藤澤副館長）ＨＵＧに関しましては、当館で単発に行っている訳ではなくて、校外学習等で当館に見学に来ていただいている学校等が事前学習、事後学習の中で、より深く取組みたい、その一つのメニューとしてＨＵＧをやりたいという中で、当館の職員が講師になってやっているものです。ＨＵＧに関しましてはご案内のとおり市町村レベルでもかなり力を入れてやっておりますので、当館としてもそういったところと様々連携を図りながら、ＨＵＧのやり方をブラッシュアップしていきながら取組んでいければと感じております。

（南委員長）講師は職員がやられているのですか。

（立花副館長）当館の職員で社会教育主事の資格を持っている中学校の教員が講師となって行いました。

（高橋委員）小学生でも避難所運営訓練は理解して取り組めるものなのですか。

（立花副館長）小学生は自分達がそういう状況になったときにどう対応するのかを自分なりに考えて取組んでいます。伝承館の見学後に取組んでいるので効果的だと思っております。

（オンライン解説の実施について）

（越野委員）提案事項ということで、リモート発信について、例えば遠距離の学校とか人達は、中々陸前高田まで来るのに大変だと思うんですよね。そこでオンライン研修みたいなものができないか、ということです。私も今日午後からＪＩＣＡの研修でフィリピンの人達にオンライン研修を行います。だから外国の人達もオンラインというかたちで伝承館の状況を見学できるのではないかと思うのです。例えば鹿児島のある小学校にオンライン研修で津波の状況を教えるということができると思います。三陸 TSUNAMI 会議だってコロナの影響で中止したと言っていましたけど、これだってオンラインでできると思うのです。

大学との連携もそうです。岩手大学でもオンラインで講義をやっていましたので、ぜひオンラインを実現してほしいと思います。
（南委員長）越野先生、演習はリモートでは難しいという印象がありますけれども、講義ならやりやすいとか、越野先生のご経験からいかがですか。演習でも大丈夫ですか。
（越野委員）例えばですね、伝承館にも一般の人達が回るコースがありますよね。それをライブ中継するとか。解説員が解説をして、その中で誰か質問があればそれに答えていく、そういうかたちでできないかなと。ｉｐａｄとか携帯のノートパソコンの機材を用意して、誰かが撮影しなければなりませんけれども。１箇所に留まって講義するというかたちではなく、動きながらライブ中継して質問に答えていく、そういうかたちでテストケースしてみてはどうかという提案です。
（里舘課長）昨年度の報告書にも記載しておりますとおり、県外の学校からの相談を受けて、リモートで館内の解説を行ったことがございます。当館には機材や通信環境が整っておらず、機材を持つ人の手配などの調整事項がありまして、本格実施ということではなく試行というかたちで取組んでおりますが、実際に取り組んでみての感想や課題等を検証しながら、できる範囲で取り組んでいきたいと考えております。今年度も県外から実際に来館できないという学校から相談をいただいておりますので、繰り返しながら実施していきたいと考えているところでございます。
（柴山委員）昨年東北大学大学院の授業で 90 分ｉｐａｄを使って解説員からお話をしていただきまして、大変好評だったので、特に問題はないなと分かったので、あとは伝承館としてできるかどうかということだと思うので、お願いできればと思います。
（越野委員）あとですね、もしオンラインのハードルが高いということであれば、YouTube とか、これは質問を受けられないですが、チャットで質問を受けられるようにして後で答えることもできますので、YouTube だったら、撮影してそれを流せばいいだけですので、なるだけ多くの人や遠方の人、あるいは外国の人が発信できるようにしたらいいのではないかな、と思います。

（環境変化に応じた解説ガイドラインの見直しについて、他の施設との情報共有について）
（五味委員）私からも２点あるのですけれど、最初に伝承館がオープンしたときに、基本的に解説員の方々の解説内容については、おそらくガイドラインといいますか、マニュアル的なものを作られて、それに沿って皆さん基本的にそれでお話をされているのかなと思います。ちょっとそこは想像で言っているので、もしかしたら違うのかもしれませんが。ただ、段々時間が経過していく中で、その後、例えば内容の見直しというようなこと、あるいは再検討というようなことが検討されておられるのかどうか、お聞きしたいなと思いました。もちろん、メンバーもどんどん変わる中で、それをどんどん更新していくっていう難しさ、ガイドの方々の交代もあると思うのですけど、その中で、どんどん更新してしまうと、何を話していいか分からなくなるということもあるかもしれませんが、もとのガ

イドラインから、徐々にこうバージョンアップしていくということを検討されるといいのかなと思いました。その際に、やっぱり環境も変わっているということを考慮されるべきかと思いまして、先ほど、例えば石巻や釜石、おしゃっちの施設見学もされているということですが、パークガイドが復興記念公園の遺構をどのように案内をされているのか、他の施設でどのようなガイドをされているかということを、相互に情報共有しながら、かつ、ディスカッションしながら補い合うことを検討されると、より有機的にゲートウェイとしての機能も高まっていくのかなと。「あっちに行けば更にこういうことが聞けますよ」というようなことを一言添えることができるといいのではないかな、と思っております。それから来年度は陸前高田市の博物館がオープンするということで、それも新しい連携対象になっていくのではないかと思いました。

それから２点目です。これは伝承館ではなくて、もしかしたら他の部署になるのかもしれませんが、昔、自分自身が修学旅行に行った時のことを思い起こしながら今日の話を聞いていたのですけれども、広島の原爆資料館に行った時に、何が記憶に残っているかというと、すごくまざまざと、人形が飾ってあるシーンが思い浮かぶのですが、多分すべての解説の内容とかがもちろん記憶に残るわけではないので、非常にインパクトがある場面といいますか、状況みたいなものを、それぞれの人が心に刻むというのが修学旅行の意味なのかな、というふうに思っています。そうなったときに、例えばこの伝承館を修学旅行で訪れた子供たちが何年か経った後に、何を記憶に残っているのかということを、長い時間の中で検討していくといいのかな、と思いました。だから、伝承館に来てすぐアンケートを書くというよりかは、何年か経った後に「何を覚えていますか」というようなこととか、あるいは実際に過去、例えば小学校、中学校、高校というふうに、訪れたこと、全然訪れたことがないので、何かその防災に関する意識だったりとか、あるいは災害についての知識だったりとか、そういったものの差がないのかどうか、そういったことも、長い時間かけて検討していくと、伝承館の意義とか価値というものを、より検証していけるような気がします。

（藤澤副館長）今、五味先生から２点目の、何年か経ったら、ご覧になった方の防災意識がどう変わっていくのかということを聞いて、なる程と思いました。当館の常設展示の最後のコーナーに、一人一人のこれからの行動が、あなたの地域の未来を変える、というふうなメッセージを出しておりますけれども、私たちも、子供達が、将来どういう地域での役割ですとか、防災意識がどう変わっていくかというのは、非常に気になるところでございますので、何かそういった図れるものがあればいいなというふうに、感じたところでございます。

（立花副館長）中々子供達ですね、すぐに伝承館を見たからといって、確かに感想文を見ると、「震災のこんなことが分かった、こういう辛いことがあったんだ」とかありますけども、学校の先生方の方は、そこから次にどう未来に繋げていくかというのが大事なんだと言われておりまして、そこのところですね、やはりすぐには分からないと思いますけども、

小学校の目で見て次中学校で来て次高校で来てというのは、発達が異なる段階で来て見てもらうというのも中々いいのかなとは思ったりしておりました。確かに長い目で見て、防災意識がどう変わっていくのかっていうのは、本当に大事なところかと思います。
（五味委員）これは多分伝承館でアンケートを実施するというよりは、例えば、県の教育委員会さんが、例えば何年かしたときに、県内の高校だったり、我々大学で実施することもできるかもしれませんけれども、そういう広い対象をもとに、伝承館の意義みたいなものを測るというようなこともチャレンジしてもいいかな、と思いました。

（出前授業の取組について）
（工藤委員）来館者数の状況を見ますと、県立博物館と比較して桁違いに多く、非常に羨ましい限りではございますけれども、やはりこの伝承館といいましても、皆様からのお話を伺っておりますと、様々な役割を期待されている施設だな、というふうに感じております。参考までに博物館の取組みを紹介させていただきますと、学校教育との関連で、博学連携と言いまして、学校の方に出向いてですね、教育課程にあったようなものを見せながら授業するという形で、歴史なり考古なり生物なり民俗とか、様々な分野の学芸員がおりますので、それら者が学校に訪問して紹介しています。そういう面では震災の関係で学校に訪問して出前事業みたいな取組みもあるのかな、というふうに感じております。あと、やはり現在の修学旅行は過去のルートと全く異なっておりまして、県立博物館もここ数年青森、秋田、宮城からいらっしゃる小学生中学生が多いのですけれども、本来であれば、多分宮城とか東京の方に行ったりしていますので、コロナが収まってくるとまた変わってくる可能性もあるとは思いますけれども、いずれ情報発信というのは、我々もそうですけれども、努力していかなければならないだろうな、というふうに感じております。

（総括）
（南会長）もっとご発言したいとは思いますが、時間に限りがありますので、本当に沢山の視点から回を重ねる毎に段々ハードルが高くなってきているところがあるかと思いますが、これだけの実績を積み上げてこられていることの上にということでありますので、私から言わせてもらいますけれども、すごく混み合ってきて大変なのに、更に更にということは難しいんじゃないか、限られている人員の中で、工夫しながら改善していく、変えられるところは変えていく。時間を長くみた取組みはですね、それについてのご意見は大切にしていかなければならないのかなと、見直しをしながら、改善をしながら、ということを続けるということでしたね。一つはそれぞれのニーズに合わせるということが求められると、学校、来訪者の方々の遠い近いも含めて、それぞれに対応していくことが求められているんじゃないかということ。あるいはゲートウェイ機能の広がりとして、これまでも推進していきたいと思いますが、元々の趣旨に沿っての他の伝承館との繋がりですとか、観光との連携、他の主体との連携、いろんな協議なんかができれば長続きするし、お互い

持ち寄れるものがあるだろうということだと思いますが、あるいは長期的に、長い目でみたときに、何年かしたときに、振り返ったときにどういう効果があるのか、そうした時間的な意味での短い長いというところも、主体とか空間的にも広がりをどう持たせていくのかということが、今求められ出しているのかもしれませんね。40 万人を迎えて本当によく進んできたと思いますが、ぜひそうした工夫を、できるところ、皆さん知恵を集めながら、進められたら、ということかと思いました。まとめるということもございませんけれども、私の印象を述べさせていただきました。それぞれの委員からいただいたご意見を大事にしながら、今後の運営に生かしていっていただきたいと思います。

次に、その他ということでございますが、各委員からご発言等ありますでしょうか。

（道の駅の地域活動について）

（木村委員）お聞きしようかどうか迷っていたのですが、観光と物産というところでお聞きしたいのですが、道の駅には物販というのがありまして、かなりのお客様がいらしていただいております。そこに関係する方々から話を聞きますと、伝承館と併設してあるもので、他の道の駅の物販とは異なり、規制といいますか、考え方があって、積極的に販売をするというのが、ちょっとしにくい状況にあると聞きました。私事を言いますと、震災で親戚が＊名亡くなったんです。地域の知っている方とか、本当に何十人という方が亡くなって、実際この施設に足を運ぶというのも個人的には実は複雑な気持ちがある訳で、ここに来ると今でも厳粛な気持ちになるんですけれども、そういったことを踏まえながらも、やはり物販というエリアというものは、地域経済にとっては大きな拠点といいますか、施設なもので、どういったかたちで積極的に物販だったり経済活動を展開できるのかな、というところのご意見をお聞きしたかった。この場ではお聞きすることは難しいと思いますが、後で結構ですので、ご意見をいただける場を設けていただければありがたいな、と思っております。

（南委員長）先程のゲートウェイの広い話もありますが、足元の道の駅ですし、地元の被災した方と次の地域づくりをしている人達を繋げていく、元々の初心のところだったと思いますので、ぜひそういうご検討をどういうかたちでもっていくのかも含めてしていただきたいですね。伝承館ではごめんなさい、難しいとは思いますが、できるところを探していければいいですよね。よろしいですかね、ご意見いただいたということで。

（三陸花火競技会の視聴者について）

（伊藤委員）1 点だけ情報提供ですけど、10 月 9 日に三陸花火競技大会を開催させていただいて、ＳＮＳ、YouTube で動画配信させていただきました。同時視聴していた人達の比率ですね、東北での花火大会をどういう人が見ていたかというと、トータルで 126,478 人が見ています。うち 92%の 116,000 人は日本人ですけれども、次に多いのは 5,109 人で意外でしたが韓国でした。３番目は台湾の 1,200 人でした。一番遠くですとイギリスから 53 人

が見ていました。今、東北に関心を持っている国ということで、韓国の人達が、今コロナ禍で来ることができませんが、興味を持っている、その方々に対して情報発信していただけると、効果的なのかなと思います。
（南委員長）はい、どうもありがとうございます。それでは議事は以上となります。ご協力ありがとうございます。事務局にお返しします。

（立花副館長）それでは委員の皆様、長時間にわたりましてご審議いただきまして、ありがとうございました。今年度の開催につきましては、これが終了となります。
　本日いただいたご意見を踏まえ、伝承館の展示、また、教育普及事業等に取り組んで参りたいと思います。
　本日は誠にありがとうございました。

（以上）